

能代高

19

神宮の覇者

能中（能高）五十年の歴史の中で、ひとときを輝く、金の星。それは初めて日本一の偉業を成し遂げた北条教一（銘木店経営、能代市体操協会会長）ら9期生中心の体操部。

彼らの栄光は、時の流れとともに、ますます輝き、重みを加える。あの日の感激、戦地から帰って再び目にしたあの光景、ほど北条をふるいたせたものはない。

「やったーホントにおもしろい！」
「なんだ（涙）こぼれで、しかたねな……」

昭和十二年十一月三日。明治神宮大会。能中体操部優勝――

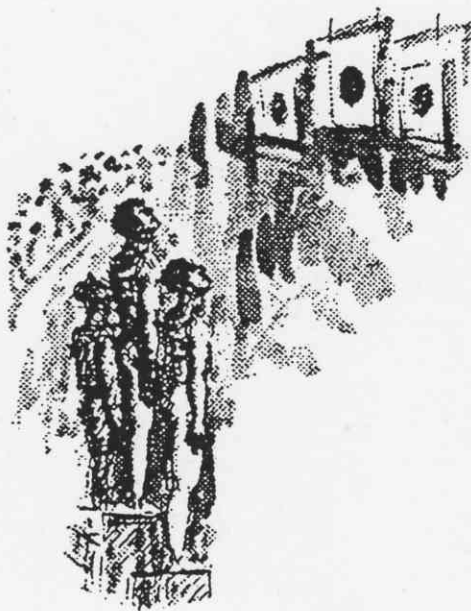
校史に残る見事な全国制覇。それは北条たちが、二年前に涙ながらに誓いあい、ひたすらめざした「日本一」の座。血のにじむ努力、学校あげての応援が大きく実を結んだ。

能中体操部が全国大会に初出場したのは昭和十年。第八回明治神宮大会。学校創立十周年を飾るにふさわしかった。3期の相沢浩二郎（中田初雄県議事務所）ら体操部の先輩たちが夢に見たあこがれの全国大会。

この時、二部に出場した能中チームは五位。スイ星の如く現れた能中が、まさかこの二年後に「日本一」になろうとは……。

だが、太田口政治先生の目に狂いはなかった。さすがは名指導者。大会が終わったその場で、選手にこういった。

「よくやってけた。お前たちには、二年後がある。その時だ――」



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

ば、絶対全国優勝できっと

「ハイッ、がんばるす」

「ハイッ」と誓いあつたのが北条、山方泰文(秋田工業高校)、相沢卯平(秋田杉材社長)、工藤正之助(商業)、佐々木博(会社員)の五人。みんな9期。まだ三年生だった。

「お前たち、三年生だとも、みどころある。がんばれ」

期するところがあつた太田口は、あえて三年生に主力をおき「二部出場」の作戦で臨んだ。全国大会は、四、五年生主体の「一部」。三年生以下の「二部」とに分かれていた。

日本一への道のり――

文字通り血のにじむ練習、また練習。手の皮がむけ、鉛筆もよく持てなくなるほど。

この猛練習を乗り越えられたのは、学校あげてのあたたかいバックアップがあつたからだ。

「キミ方、練習のほう、しっかりやってくれよ」

級友は、そういつて、そうじ当番を快く代わつてくれた。

教練担当・金谷清教官のあのことばも、北条たちをハッスルさせた。

「いいが。戦いは、勝たねばならねどー勝で！」

命令とあつては、なんとしても勝たないといけない。

北条らは教練の時間など、自転車隊とか後方の旗振りなど比較的楽な「任務」だった。体操の練習に支障がないよう、金谷教官が細かく配慮したのだった。

二年がまたたくまに過ぎた――二年に一度開催される神宮大会。九回目を数えた昭和十二年。

「ふだんの実力出せば、きつと勝てる」

太田口先生の励まし。

競技は、日比谷公園の競技場

で行われた。こんどは「一部」

出場。北条、山方、相沢と二年前の顔ぶれ。同じ9期の草皆英二郎(木材業、東京)、11期の小林(旧姓佐々木)繁(商業)が加わった。

チームワーク抜群。一流の競技大会を見せて歩くなど、太田口先生の指導も大きくモノをいった。能中は断然強かった。

堂々の日本一。他校に大差で優勝を手中に。

「おお、大きな日の丸！」

優勝の感激の中で見た日章旗はひととき大きく輝いて見えた。

この大会で忘れてならないのは、同じ秋田勢の秋田工業が二部で優勝したこと。「体操秋田」の名が全国津々浦々へ。

「勝で！」

そのことばを残して戦地に行った金谷教官は、戦場の露と消えた。北条たちの朗報も知らず

に……。

戦後ほどなく、北条ら「神宮の星」は、全員無事、戦地から帰った。母校にかけつけて、真っ先に目にしたもの、それは、北条たちが日本一になったとき学校で買ってくれた鉄棒。そして一生懸命にぶらさがっている鍋谷鉄己、小野喬らの若き姿だった。北条は思った。

「ああ能中体操部の灯は消えず」

(敬称略)

